

天 界

第四十九號

第五卷 大正十四年二月號

無 限

C. N. ホ ル ム ス

荒 木 俊 馬 譯

天つ日の、はろげきあたり、躍りつ巡る、
 天つ眞洞まほらの星々の、眞中まなかにありて人の子は、
 星霜一瞬の短かきを、
 何事かその業わざを遂げなむと、
 雄々しくも、住居すゐなぞ組む。

大空に浮べる塵か、微さなる惑星の上、
 淡光たんこうる銀河の眞中。
 かくあれさ神かみや劃さだめし、巨ひなる、壯嚴の中、
 はた萬有のこそこそが、服すなる大法の中。
 人の子は住居すゐなぞ組む。

深淵の果てなき底に、

人の子が呼びて陽言ふ、かがやかに一の星居り、

夜はまた夜のみ空に、よろづの星の閃めきかゝり、

永却に永却に

深淵の果てなき底ゆ、

かがやかに、もろもろの光湧き來も。

今の世の科學の智慧は、

默示して、更に言ふなり。

あまりにも遙けく在りて、見るによしなき、

太陽に等しき星の、無慮ありて、

『無限』の中に蔽はれたり、こ。

あゝ無限――。

われ等をめぐり、無限の空間ぞよこたはる。

底知れぬ深淵の、あゝ、その底よ。

人類を鍊え造れる、

神のみぞ、ただ、そを知るべきか。(一九二三、一二、三〇)

ホルムスは昨年十一月號に山本理學士によつて紹介せられてある、米國の有名な天文詩人である。彼の詩にボプ
ユラー、アストロノミーや其他の新聞雜誌にその讀者をよるこぼせるのであるが、今こゝに譯出したのは昨年の
同紙に出て居たものである。原文の流麗な詩調が拙譯によつて大半害せられてゐる事は譯者の悲しむ所である。
眞にホルムスの詩を愛する人は原文について讀まれん事を乞ふ。